

ふるさと見聞

第一部 猿橋物語

中世の史料として評価の高い「妙法寺記」の記述が、大月市史に紹介されている。西田信玄が生れる前年の永正十七年(一五二〇)三月、小田原に在る猿橋を築いた。現在よりやや上流へ、掛川内守(駿河大納言徳川忠興の用

木造の橋のこと。何十年に一回かは、当然架け替えが行われたいと推定される。甲斐の金山研

架け替えの記録

<架け替えの歩み>

(大月市教委調べ)

宝暦8年(1758年)	架け替え	不明
明和3年(1766年)	(修理)	
安永6年(1777年)	架け替え(出来形帳あり)	
天明8年(1788年)	(修理)	
寛政3年(1791年)	架け替え	
享和2年(1802年)	架け替え	
文化11年(1814年)	(修理)	
文政9年(1826年)	架け替え(出来形帳あり)	
天保8年(1837年)	(修理)	
嘉永4年(1851年)	架け替え(出来形帳あり)	
明治5年(1872年)	(修理)	不明
" 33年(1900年)	架け替え	
昭和24年(1949年)	架け替え	

旧家から古文書 職人の賃金まで

<6>

修理の記録克明



架け替えの陣頭指揮にあたる市教委長の太田さん

の大沢良作さん(左)は驚いた。内容は次回で詳しく紹介するが、それには架け替えの工期はもろろん、楯(はねき)や桁(けた)など各部分の建材の寸法、数量から職人らの賃金までが克明に記録されていた。

その後、地元の旧家から文政九年(一八二六)の出来形帳、安永六年(一七七七)の出来形帳などが相次いで発見された。それぞれの出来形帳とはその前の架け替え、修理のいきまが記録されており、架け替えの歴史が、具体的な資料によって克明に裏付けられた。

それによれば、猿橋は二十年程度に一回ずつ架け替えがあり、その間に修理が行われてきた。また楯を両側に埋め込んだ寄棟が、何代も何代も継ぎ重ねられてきた様子もうかがえる。

「昔の人たちが苦勞して残してきたものを、いま妙な橋に変えたら、残念がらぬです」と

子供のころ、関東大震災にもビクともしなかった猿橋を見て「日本一丈夫な橋」と誇りに思った太田さん。いま架け替えの責任者として陣頭指揮にあたる。

人の時代、元和年間(一六一五-一六二四)の架け替え工事には丹波村の金廻りたちが加わったとの興味深い記述がある。ただ橋の構造や工事の様子は伝承も記録はほとんどなかった。

架け替えの機運が高まる中で、大月市教委は慣例の文化財調査「猿橋展」と絡打って聞いた。将来の架け替えに備え、埋もれた修理関係資料が出て来ることを期待したのだ。

古文書が寄せられた。専らから明治にかけての出来形帳(完工報告書)や修理帳の控えだった。その一つ、嘉永四年(一八五二)と記された「甲州道中猿橋地内字大猿橋掛替御普請出表形帳」を解説して、市教委長

架け替えの機運が高まる中で、大月市教委は慣例の文化財調査「猿橋展」と絡打って聞いた。将来の架け替えに備え、埋もれた修理関係資料が出て来ることを期待したのだ。

架け替えの機運が高まる中で、大月市教委は慣例の文化財調査「猿橋展」と絡打って聞いた。将来の架け替えに備え、埋もれた修理関係資料が出て来ることを期待したのだ。